

にらのじかまき栽培について

1 試験のねらい

にらは水田転作野菜の主要品目の一つとして年々栽培面積は増加傾向を示し、栽培農家の経営面積も大規模化してきている。このような中で、一昨年来省力化を目的とした育苗並びに定植労力を要しないじかまき栽培が試みられている。そこで、じかまき栽培法確立のためは種期と株当たり発芽本数が、収量・品質に及ぼす影響について昭和55～56年度の2か年検討した。

2 試験方法

品種はグリーンベルトを用い、昭和56年4月10日、4月25日及び5月10日に畝幅40cm、株間20cmの4条には種し、それぞれのは種期に株当たり発芽本数5、8、11及び14本を組み合わせた計12処理区を設けた。試験規模は1区2.2㎡(20株)2区制で、施肥量は三要素ともa当たり成分量で4.5kg施用し、保温は12月6日に行い、以降4回収穫した。

3 試験結果及び考察

4月10日まきは発芽後低温のため初期生育がやや遅れたが、その後の生育は順調で、各区とも旺盛な生育を示した。9月には各は種期とも14本区で倒伏し、その程度はは種期が早いほど大きかった。

収穫時の茎数は、発芽本数の増加にしたがい多くなる傾向を示し、株当たり14本で最も多く、5本は少なかった。収量はは種期が早く、発芽本数が多いほど増収し、4月10日まきの14本が最も多収であった。

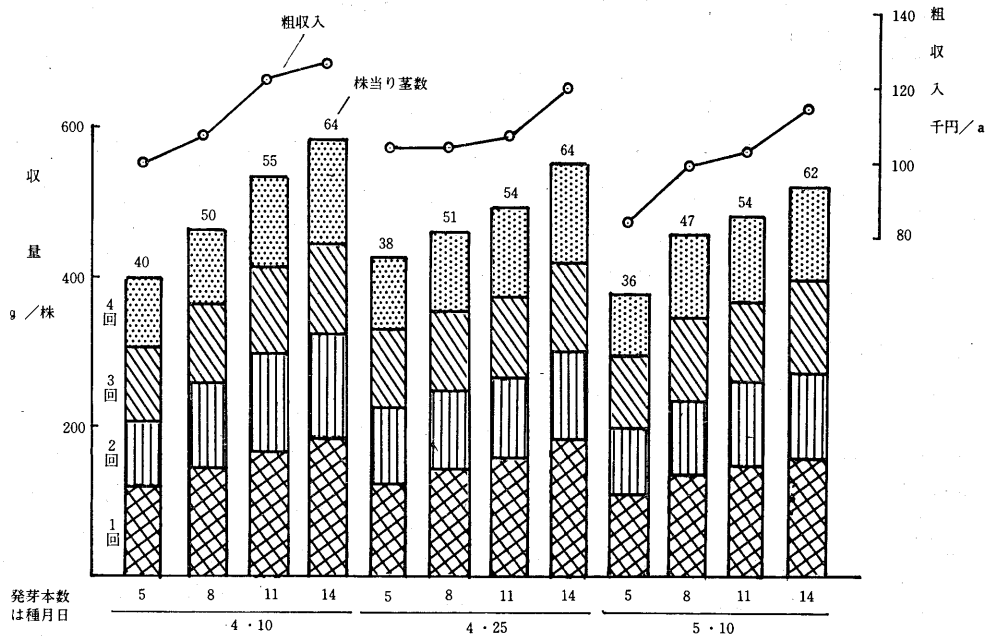
収量と葉幅別単価から、a当たり粗収入を試算すると、4月10日及び4月25日に比べ5月10日まきは収益性がやや劣った。一方、発芽本数間では今年度の単価からは本数が多いほど収益性は高く、葉幅より収量の影響が大きかった。

収穫時の葉幅は図-2のとおり、収穫回数が進むにつれ狭くなり、発芽本数間では多発芽本数区ほど茎数が増加したため、葉幅は狭くなる傾向を示した。なお、4回収穫時には多発芽本数区で6mmを割った区があり、その程度は遅いは種期ほど大きく、特に5月10日まきでは8本以上の発芽本数で6mmを下回った。

4 成果の要約

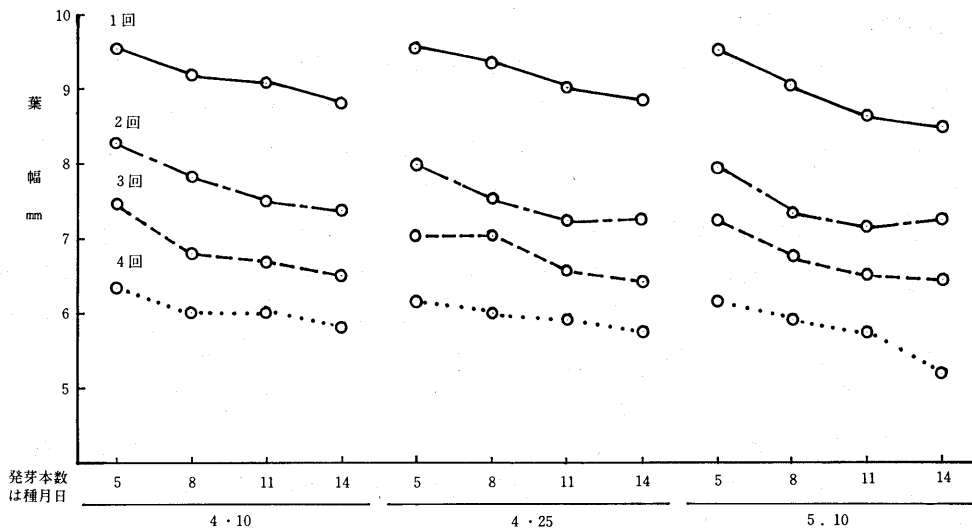
栽培労力の省力化を目的とした、にらのじかまき栽培法確立のためハウス冬どり栽培で、は種期と株当たり発芽本数が収量・品質に及ぼす影響を検討した結果、は種の適期は4月中と考えられたが、5月上旬まきも刈取回数を3回程度にとどめれば栽培可能と思われる。一方株当たり発芽本数は倒伏防止と品質も加味して、8～11本程度が適当であるが、実際場面では発芽不良を見越しこれよりやや多めにまくべきと考えられる。

(担当者 野菜部 室井栄一)



図一 1 は種期と発芽本数が茎数、収量及び経済性に及ぼす影響

粗収入は、昭和 57 年冬～春の平均価格（100 g 当たり葉幅 8 mm 以上 33 円，
6～8 mm 22 円，6 mm 以下 17 円）より試算した。



図一 2 は種期と発芽本数が葉幅に及ぼす影響